フランスで運転免許をとった話

星　野　常　夫

1年間のフランス滞在中に、運転免許を取得した顚末を書いていこうと思う。日本では車を運転していなかったし、もちろん免許証も持っていなかった。四十歳をすぎ、しかも異国の地でどうしてこんなことを考えたのか。それは、こんなわけがあった。ボルドー市に住んでいるフランスの障害児学校の教員である友人ミッシェルの家に何度か招待されジロンド県、アキテーヌ地方をドライブに連れていってもらい、そのなだらかな起伏と豊かな田園にまさに魅せられてしまった。こういう、フランスの田舎を車で巡ったら、さぞ楽しいだろうと思ったからである。

1　自動車教習所

取得のための第一歩はまず、自動車教習所を選ぶことから始まったのだが、その前に自動車教習所について話をしておく。それをフランスではオートエコールAuto-Ecoleと呼ぶ。どんな小さな町でも、道を歩いていると必ず、こう書いてある看板を目にするものである。ひとつの町に、ひとつのオートエコールというところだ。見たところ、こぢんまりとした事務所という感じである。ガラスごしに覗くと、事務用の机が一つ、そして部屋の一角にスチール製おりたたみ椅子がたくさん並んでおり、スライド用のスクリーンが置いてあったりする。これが、どこにでもある典型的なフランスの自動車教習所である。そして、なによりも日本の自動車教習所と違うところがある、無免許の教習生が運転を練習するための特別な自動車コースはない。では、免許をとろうとする人はどこで練習するのだろう。

はじめてハンドルを握ったその日から普通の道路を走るのである。そんな無茶なと日本人は思うだろう。でも、本当なのである。

教習所の候補は二つあった。

一つは、私のアパルトマンのすぐ近く、歩いて3分のモリアン通りにあるオートエコール・ドゥ・レグリズ。その名が表しているように、ブローニュの町の教会Nôtre Dameのすぐそばにある。ここの利点は、家から近いということ。

もう一つは、パリで発行されている日本人向けの週刊新聞紙オブニOVNIにその広告が掲載されていたオートエコール・マイエMAYET。パリ6区にあり、家からはメトロで12分位かかる。一応この教習所へ様子を見にいった。経営者はもちろんフランス人で日本語はまったく通じない。ただ、その広告の効果だろう、何人かの日本人が現在教習を受けているという。とすれば、彼らから、いろいろと情報を得ることができるかも知れないという利点はあったのだが、家から近いということと申し込み金が1000フラン（約2万5千円、以降1フラン：25円で計算してください）も安いので家のそばの教習所にした。その教習所には、受付の女性が一人いた。失礼なことに名前を忘れてしまったのだが、ささくな中年女性であった。彼女によれば、その教習所では日本人は初めてであり、外国人のための特別な配慮はなくフランス人と同じように扱われる。そして、取得するまでには普通二、三か月かかるとのこと。私が言葉のことが心配であるといったら、一度、交通法規の授業に参加してから決めなさいといわれた。申し込む時に、試験の費用・書類作成費・法規の授業受講費として985フランを支払い、ほかに200フランの収入印紙、滞在許可証Carte Sèjourのコピー、顔写真を数枚提出した。そのほかの費用としては、1回1時間の運転につき170フランその都度に支払うことになっているという。

免許を取得するためには二つの試験に合格しなければならない。交通法

規Codeと運転技術の試験である。両試験ともExamenであり、Concoursではない。つまり、定員制ではなく一定の水準に達していれば合格となるのである。

2　交通法規の試験

まず交通法規の試験について話を進めていこう。本試験の準備として、ほぼ毎日1時間ずつ模擬試験が教習所で行われる。これには、何回でも無制限に受講できる。会場にあるスクリーンにスライドが映し出される。例えば、今にも前の車を追い越ししそうな情況にある車の運転席の位置から見た映像、あるいは様々な標識が立っている道路をやはり車の運転席の位置から見た映像など実際のイメージに近いものであった。そして、それぞれの下の部分に問題文が書かれてある。「私は、前の車を追い越しすることができる」とか「ここに駐車をすることができる」あるいは「次の十字路ではどちらの方向に進行できるか」などと。映像のない、文だけで構成されている問題も40題中数題ある。模擬試験の指導員が映像が映し出されると同時に問題文を読み上げる、その間に答えを考える。答えは選択肢の中から選び、その数は1個のこともあれば4個までの複数の場合もある。解答用紙は、特別な様式で、それぞれの問題の正答を鉄筆のようなもので穴開けをする。そして、模擬試験では、最後に答え合わせと解説がある。市役所で行われた本試験は、模擬試験と同じ形式であり、40題中5つ以内の誤答ならば法規は合格となる。

現在、フランスでは16歳から自動車免許を取得することが可能なのである（ただし、18歳までは成人が同乗との条件付きであるが）。それでだろうか、受講性の年令層は、10代の後半といった感じの若者が多い、しかし、わずかではあるがいわゆる中年もいた。恰幅のいい黒人男性とは、すぐに挨拶を交わす間柄になった。それから、よくおしゃべりをする、しか

も少々フランス語がなまっているなと思わせる女性もいたが、ポルトガルからの移民だと後になって聞いた。彼女にはやがて帰国する私がどうして免許を取ろうとするのか理解できないようだった。そして、私が帰国するまでに取得することは無理だろうと言い出す始末で、そのことが大いに私を奮起させてくれた。初めて、受講したときの結果は、誤答数23であった。つまり半分以上が間違っていたのである。悪戦苦闘。約３ケ月後には法規を合格するまで模擬試験の結果を毎回グラフに記入していた。そのグラフは、心理学でいう学習曲線そのものだった。その誤答数が、やがて10前後になり、しばらく停滞し、その辺りをウロウロ。やがて、コンスタントに１ケタを確保し、そのうち合格圏の５以内に到達するようになる。その間、落胆と希望の繰り返し。結果が悪いと家族への八つ当たりとなる。まるで受験生になった気分である。

誤答の原因をいくつかに分類した。①フランス語の単語・術語が分からないケース。②言葉は理解しているが、交通法規の理解が足りないケース。③うっかりミス、見落とし、勘違いの類い。言葉の問題でいうと、例えば、日本では３つのペダルをアクセル、ブレーキ、クラッチと呼ぶ（それらは、英語からきたものであり、英語圏ではおそらくそのまま通用するのではないだろうか）。フランスでは、それぞれ accélerateur, frein, débrayage のペダルと呼ぶのである。また、tout droit と à droite は一見似ているのだが前者は「まっすぐ」、後者は「右へ」とその方向は異なるのである。その対策として、専用の単語帳やノートを作り、できるだけ繰り返し確認するようにした。

本試験には、ブローニュの町の各教習所から４、５名が選抜され総勢約40名が受験をした。教習所が模擬試験の結果、合格圏に入っていると判断した者を受験者に指名するのである。一度不合格になると、次の機会は一か月後になるというので、ぜひとも一回で済ませたかった。結果は試験の

直後にわかるようになっていた。誤答数4で合格と判定されたとき、フランス人の試験に合格したという喜びと数か月重くのしかかっていた重圧からの解放感を感じた。そして、この試験は教習所同士の競争にもなっているようで、我がオートエコール・ドゥ・レグリズの4人の受験生が全員合格したので引率した指導員が得意満面の面持ちであった。

3　運転技術の試験

法規の受講を開始してから数週間後に初めてハンドルを握った。私の担当教官はル・ルーLE ROUX氏というブルターニュ出身の体格が良く、鼻筋が見事に通った50代の男性であった。日本の自動車教習所の教官について、私の聞く範囲では、かなり人当たりの強い人、恐くて言葉遣いも乱暴な人がいるという。それが原因で途中で教習生を止めてしまった実例を耳にしたことがある。一方このムッシューはいつもフランクで、たまに怒ることもあったが概ね理詰めで指導してくれた。毎時間、紙に要点を書いてくれた。これは、大いに助かった。彼がかつて教えた教習生といった人たちがこの町に多く住んでいるようで、私の運転中、何度か道を歩いている人たちと話をするため車を止めさせることもしばしばあった。まさに、地域の中に根付いている感じがした。

さて、一回目の運転の時は、冒頭にも述べたように全くの初体験だった。といっても、ギアをロウLe Premierにしてからアクセルを徐々に踏み込み、クラッチを離していくという程度の知識は持っていた。ムッシューの指示で私は車を動かし始める。もちろん右側通行だ。いつも歩いている道なので知っている町並みだ。「車が動いている」「自分が運転している」この時ばかりは、ちょっとした興奮状態だった。あまりに遅い速度に、後ろの車がクラクションを鳴らす。はっきりいって、こんな初心者が一般道を車で走行するのだから、まわりの車にとって迷惑だと思う。しか

し、運転技術と一緒に、実際の場面での臨機応変さも習得していくこのフランス式もなかなか優れていると思う。初心者ドライバーの私などが言うのはおこまがしいが、技術もさることながら、常に変化する状況（標識・道路の状態変化、車の進入、人の横断など）にどのように対応していくか、これが実際の運転のポイントだと思うからである。そして、またこれもフランス式だと思うが、後半になると高速道路での練習が加わる。パリ近郊の高速道路は無料である。110キロあるいは120キロでの追い越しの練習も何度もやらされた。日本に帰ってから考えてもこの時のことが信じられないくらいである。

教習所の車の車種はなにか。私の使っていたのは、ルノー・5サンクというフランスを代表する国民車で排気量は1100ccであり日本の車に見慣れた目には小さく感じられる。同タイプのものとしてプジョー205というのもあり、おそらくフランスでは半分以上がこの1100ccのものである。教習所の車の屋根にはAuto Ecoleと書いたカマボコ（日本のタクシーの屋根についているようなもの）があり、これを見て、フランスの賢明なドライバーはできるだけ避けようとし、いじわるなドライバーはわざと警笛を鳴らす。

車の状態はどうかといえば、整備も掃除も不十分である。ようやく最近になって車検制度が話題になっているくらいだから当然といえるだろうか。フランス人の家はとてもきれいなのにどうして車はあんなにもきたないのだろうか。駐車の方法も独特なものである。パリでは駐車可能な道路と禁止している道路とにはっきり分類されており、前者の場合には、ビッシリと並べて駐車する。どうやって車を入れたのかと感心するくらいの狭いスペースに、器用に前後の車をバンパーで押しながら割り込むのである。教習所の車には特別な駐車スペースがあるわけでもないので、やはりこのように駐車されている車を発進させるのである。だから、車の出し入

れだけでもフランス式駐車の訓練にはなった。

実地試験の当日、ムッシュール・ルーに連れられて4人の教習生が試験の行われる場所にいった。もちろん、特別な試験場があるわけでもなく、一般道を走行するのである。一人当たり20分位、助手席に座る県の係官の「真っすぐ」「右へ」「左へ」といった指示どおりに車を動かすのである。私のそのときの反応、例えばバックミラーをよく見ているとか、ウィンカーが正確であるとか、標識を理解しているかとかの判定をするようである。当日は、係官のほかにもう一人特別に見習い係官が同乗していた。試験運転終了後すぐに結果がでることになっており、合格であればピンク色の合格証明書が渡されることになっていた。私の終了後、その二人はかなり長い時間、話をしていた。私の直前に受験した女性は不合格という結果を知って泣き出して途中で帰ってしまった後だったので、余計に私は緊張して車の外で待っていた。しかし、まもなく係官がピンク色の用紙を取り出し記入を始めたので合格だということがわかった。

4　後日談

実地試験をパスしてから、本物の免許が発行されるまではピンク色の証明書が免許証の代わりをする。ペラペラな一枚の紙が効力としては免許と同等のものであるという。一カ月後、この証明書と滞在許可証の両方を持って県庁に行き、免許証が交付されることになっていた。ところが、ある日、地下鉄の中でスリに遇い財布をすられ、その中に入れてあった両方の書類を紛失してしまったのである。しかも、それが帰国する直前だったので、一時は免許の取得をあきらめた。しかし、数日後、財布の中身のうち現金以外は駅の遺失物係のもとに届けられ、無事戻って来たのであった。こんなわけで、最後まで右往左往であった。

日本に帰国してから、日本の免許に書き換えるため、免許センターに出

向いた。ところが、わたしの場合、まだ書き換えの申請ができないという。というのは、免許取得後、３カ月フランスに滞在していなければならず、１カ月足りないのであった。だから、私はこれから１カ月フランスに滞在して初めて申請できるのだ。こんなわけで、苦心して取った免許なのだが、現在のところ私が車を運転できるのはフランスを含めたEC内においてのみ可能であり、免許は持っているが日本では無免許という状態になっているのです。